



Title	「陽明文庫蔵『源氏物語』校注・訳（一）：桐壺 巻」
Author(s)	瓦井, 裕子; 松本, 大
Citation	詞林. 2021, 69, p. 1-37
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/79221">https://doi.org/10.18910/79221</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 陽明文庫蔵『源氏物語』校注・訳（一）——桐壺卷——

瓦井裕子・松本大

## ■前言

本稿は、公益財団法人陽明文庫蔵『源氏物語』（重要文化財指定。以下、陽明文庫蔵本とする）を底本として、新たな校訂本文と現代語訳、及び読解上必要となる最低限の引歌・典拠等の指摘を提供するものである。

当該本文の基礎的事項については、陽明文庫叢書において詳細な報告がなされているため、本稿では省略する。ここでは、当該本文の書写年代と本文の性格についてのみ触れておきたい。先行研究においては、おおよそ以下のようない見解が定着している。

この五十四帖の伝本は、その本文・外題の筆蹟、表紙・本文の料紙その他から判断して、鎌倉時代中期の書写と見られている三十四帖を基幹とするもので、この諸帖の本文は青表紙本でも河内本でもない別本とみなされている。これに鎌倉時代後期乃至は吉野時代にかかるころの

書写かとみられている諸帖（別本五帖、青表紙本十二帖）と、江戸時代（寛永／寛文ごろか）の補写本三帖（青表紙本系統）とを加えて五十四帖を構成している。<sup>①</sup>

右のごとく、鎌倉期書写の帖を数多く有し、かつその本文が別本であると判断されることから、例えは、池田亀鑑氏が『校異源氏物語』『源氏物語大成』に採録し、また『源氏物語別本集成』では底本に用いられるなど、別本の中でもとりわけ注目されてきた。平安期の写本・断簡が残らない『源氏物語』にあって、鎌倉期本文は平安期本文の様相を浮かび上がせる可能性を持つ。その重要な一資料と目されるのが、当該の陽明文庫蔵本なのである。

しかしながら、定家本系統の本文に強く依拠する現状の『源氏物語』研究にあつては、陽明文庫蔵本の物語世界が十分に理解・流布されているとは言いがたい。

そこで本稿では、この研究状況を改善すべく、当該本文の校注・訳を新たに作成し、一案として提示する。本稿が、定家

本・河内本の成立以前の段階における、『源氏物語』享受の実態解明の一助になれば、幸いである。

### ■桐壺卷の書写状況に関して

桐壺卷への調査の結果、本文の訂正について明らかになつた点を指摘しておきたい。

桐壺卷では、重ね書き・擦り消しによる訂正、ミセケチ、補入など本文の訂正が行われている。このうち、重ね書きと擦り消しはすべて書写者と同筆と認められ、書写と同時に行われたと見られる。これらの箇所は、訂正前の本文を視認できる場合が多く、それらを見るに、単なる書き間違いとその訂正の域を出るものではない。この巻の書写者は、書写中に誤りに気付いた場合、基本的には重ね書きによる訂正を行い、重ね書きによって判読が困難となる場合には、擦り消して新たな文字を書く、という姿勢であったと思しい。

補入も本行本文と同筆と認められる。墨色はやや異なるため、書写を終えた後に校閲を行い、書き落としている語句を補入したものと思われる。他本と校合の痕跡とも考えられるが、大きな異同が頻出する訳ではないため、現段階ではその可能性は低いと考えている。

問題となるのはミセケチである。ミセケチは桐壺卷において三種が認められる。

第一種は、墨色が本行本文と同一であるため、書写者がそ

の場で誤りに気付いた場合のものと把握される。文字の削除のみを目的とし、文字の訂正や補入は行われない。

第二種<sup>(4)</sup>は、本行本文とは墨色が異なり、書写後の所為かと考えられる。いずれの箇所も誤写が疑われる部分に見え、これも他本との校合の結果ではないと判断される。また、第一種と同じく、文字の削除のみを目的とし、削除後の訂正や補入は行わない。本文書写者による所為か否かは判断しがたいが、先述した補入の態度を見るに、本文書写者によるものであろうか。この場合、ミセケチの性質としては、第一種と同様ということになる。

第三種は、墨色・ミセケチの形状・文字削除の性質・傍記の有無といういすれの点においても、第一種・第二種とは異なる。第三種と認定したミセケチ三例のうち二例は、次のように、元の本文でも意味が通る箇所にミセケチを付した上で、新たな本文を傍記する。二重線はミセケチ、「」内は傍記を表す。

- ①日々にまよ〔をも〕りて いとよはくなりたまひぬれは  
(五ウ)
- ②心のをさまら〔さりける〕ほど、御らむしゆるす(一  
七オ)

①、削除前の本文のように、桐壺更衣の病状を「まさりて」とするには、陽明文庫蔵本の独自本文である。これがミセケチと傍記によって、諸本と同様の「をもりて」に変更されて

いる。また、②、削除前の本文「をさまらぬ」は、陽明文庫蔵本と国冬本だけが持つ本文である。これが、ミセケチと傍記によつて「をさまらさりける」という、大半の諸本「おさめさりける」に近い本文に変更される。他本との校合の結果である可能性がある。

前述のように、桐壺巻の本文書写者が誤字を訂正する際には、基本的に重ね書きか擦り消しを行う。ミセケチを付した上で新たな本文を傍記するのは、この第三種に属するミセケチ・傍記の組み合わせしかなく、この点からも、本行本文の書写者と同筆でないことが窺われる。

また、もう一例は文字の削除のみで傍記はないものの、校合の可能性がある。

③をとなひ給てのちはありしやうにもみすのうちなとに

もいりたまはす(三二ウ)

削除前の「ありしやうにも」の本文を持つものとして、河内本系統の諸本、別本の各筆源氏、麦生本がある。一方、定家本系統の諸本はいずれも訂正後の本文と同様、「ありしやうに」の本文を持つおり、当該箇所の訂正は、単なる誤記の訂正ではなく、異なる伝本との校合の結果である可能性がある。ただし、三箇所という限られた判断材料しかないので、現段階では詳細は不明と言わざるをえない。後考を俟ちたい。

以上のような本文修正の様相から、校訂本文をたてるにあたつて、重ね書き・擦り消しによる訂正・補入については、

すべて訂正後の本文を採用した。ミセケチについては、第一種・第二種は訂正後の本文、第三種は訂正前の本文を採用して校訂本文をたてた。本文の修正については、いずれの場合も校訂付記に掲出した。

### 注

(1) 阿部秋生「陽明文庫本源氏物語について」(財團法人陽明文庫編『陽明叢書国書篇第十六輯 源氏物語一』思文閣出版 一九七九年)

(2) ただし、一例のみ疑問を残す。

(3) 以下の四例がこれにあたる。「たまのをとこみこ~~來~~さへ」(一ウ)、「わりなくまとはさせ給あまやり」(三オ)、「御けしきを見たてまつる~~せうゑ~~人女房など」(一八ウ)、「(は)いせんにさふらふも人くなといど心くるしう見たてまつりなやむ」(一九ウ)。

(4) 以下の三例がこれにあたる。「あやしと見たてまつり給もよろしき事たにかゝるわかれのかなしからぬやうはなきわざなれば」(七ウ)、「やまとゆことの葉にもゝろこしのうたをも」(一六オ)、「をもしろき所なりけるを~~レキ~~いとゝいけの心ひろく」(三三ウ)。

## ■凡例

- 一、陽明文庫蔵源氏物語桐壺卷を底本とし、上段に校訂本文を、下段に現代語訳を掲出した。
- 二、本文は、底本に可能な限り忠実であることを心掛けたが、意味が通じないところは最小限の校訂を行つた。その場合は、校訂付記にその詳細を記した。また、疑義が残る箇所についても、校訂付記にその内容を示した。
- 一、本文の作成にあたつて、以下の校訂操作を行つた。
- 1 変体仮名はすべて通行のひらがなに、仮名遣いは歴史的仮名遣いに改めた。踊り字については、これを用いず、該当する文字を直接示した。
  - 2 漢字は、新字体で表記した。異体字・略字等は、通行の字体で示した。
  - 3 底本に付されている見せ消ちは、第一種・第二種については、これを反映させ、訂正後の本文を採用した。第三種については、これを反映させず、訂正前の本文を採用した。
  - 4 誤字や脱字等の誤りがある箇所は、それが明らかな場合にのみ、訂正を加えた。
  - 5 底本の表記を改めた箇所には、底本の表記をルビとして掲げた。
- 内容把握の利便性を考慮し、適宜、濁点、句読点を
- 一、現代語訳については、底本に即して訳すことを原則となりながら、現代語として意味が通るように心掛けた。
- 一、注釈には次の資料を使用した。
- 『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『古今和歌六帖』『伊勢集』……『新編国歌大観』(日本文学館)
- Web図書館
- ※ただし、以下によつて異同を確認した。典拠としてよりふさわしい本文が見出された場合は、その旨を記した上でそちらの本文を示した。
- 『古今和歌集』……加藤洋介氏の古今和歌集  
校異データ(未公開)
- 『後撰和歌集』……小松茂美『後撰和歌集
- 校本と研究』(誠信書房)  
一九六一年)、大阪女子大学国文学科国文学研究室編『後撰和歌集総索引』(大阪女子大学一九六五年)
- 篇』(大学堂書店 一九七〇年)

- 『古今和歌六帖』……書陵部蔵桂宮本 宮内序  
古今和歌六帖 上巻・本  
文編』(養徳社) 一九六七年
- 『伊勢集』……秋山虔・小町谷照彦・倉田実『日本古典評釈・全注叢書 伊勢集全注釈』(KADOKAWA) 二〇一六年
- 『長恨歌』……平岡武夫・今井清校定『長恨歌』(石田穰二・清水好子校注『新潮日本古典集成 源氏物語二』新潮社) 一九七六年)
- 『長恨歌伝』……袴田光康『源氏物語』における「長恨歌伝」の研究—「桐壺」卷篇其の一(付)金沢文庫本『長恨歌伝』)』(『文芸研究』第九一号 二〇〇三年九月)
- 『莊子』……市川安司・遠藤哲夫『新釈漢文大系 莊子(下)』(明治書院) 一九六七年)
- 『源氏釈』……中野幸一・栗山元子編『源氏物語』
- 『古今和歌六帖』……書陵部蔵桂宮本 宮内序  
古今和歌六帖 上巻・本  
文編』(養徳社) 一九六七年
- 『紫明抄』……京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学国語国文資料叢書 紫明抄 上 京都大学蔵』(臨川書店) 一九八一年)
- 古註釈叢刊 源氏釈 奥入 光源  
氏物語抄』(武藏野書院) 二〇〇九年

【1】帝、桐壺更衣を寵愛して世間の非難を受ける

いづれの御時にか、女御、<sup>かわい</sup>更衣、あまたさぶらひたまひ  
ける中に、いとやんごとなき際にはあらぬが、すぐれてと  
きめきたまふおはしけり。はじめより、われはと思ひ上が  
りたまへる御方々は、めざましきものに思ひおとしめ、そ  
りたま・<sup>給</sup>御方々は、めざましきものに思ひおとしめ、そ  
れより下臍の更衣たちなどは、朝夕の宮仕えにつけたまひ  
宮仕へにつけつゝも、安からぬこと多く思ひ積むるままに、  
人の心を動かし、嘆き覆ふ積もりにや、いとあづしうなり  
ゆきて、もの心細げに思ひ、里がちなるを、いよいよあ  
かずあはれるるものに思ほして、人の誇りをも憚らせた  
まはず、世の例ともなりぬべき御もてなしなり。

上達部、上人などもあいなう目を側めつつ、「いとまば

ゆき人の御おぼえかな。唐土にもかかることとの起りにこ  
そ世は乱れ、悪しきことも出で来けれ」ともて惱むほどに、  
やうやう天の下のあつかひ草になりて、楊貴妃の例も引  
き出でつべくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、  
かたじけなき御心ざしの類なき一つを慰めにて、交らひ  
たまふ。

父の大納言亡くなりたまひて、母北の方なんいにしへの

よしある人にて、親うち具し、さあしたりて世のおぼえは  
なやかなる御方々にもいたう劣らず、何事の折ふしにもも

「京師長吏、為之、側目。(京師の長吏、之が為に目を側む。)」(長恨歌伝)

【1】どの御代のことだつたか、女御や更衣が多くはべつ  
ていらっしゃつた中に、それほど貴い身分ではない方で、際  
立つて帝寵を受けている方がおいでになつた。入  
内当初から、「自分こそは」と自負なさつてゐる女御の方々は、  
目ざわりな存在だと見下し、嫉んでいらっしゃつた。それよ  
りも身分の低い更衣たちなどは、朝夕の宮仕えにつけたまひ  
やかでない感情を多く積もらせるままに、更衣は他人の心を  
乱し、嘆きをあまねく行きわたらせたせいか、たいそう病が  
ちになつていき、心細く思つて、里に下がることが多いのを、  
帝はいよいよ尽ぎることなく愛おしい人とお思いになつて、  
他人からの誇りをも憚られず、先例ともなるに違ひないお扱  
いである。

上達部や殿上人なども不都合なことと横目で見ながら、「ま  
こと見るに堪えないご寵愛よ。唐土でもこのようなことが發  
端となつて、世は乱れ、ひどい事態が起つたのだ」と惱ん  
でいるうちに、しだいに天下の話題の種となつて、楊貴妃の  
例までも引き合いに出すほどになつていくので、更衣にとつ  
てはじつにいたたまれないことが多いのだが、畏れ多いご寵  
愛の類ないこと一つを慰めとしてお仕えしている。

更衣の父の大納言はお亡くなりになつていて、母である北

の方が古くからの雅趣を備えた人で、両親がそろつていて、

てなしたまひけれど、とりたててはかばかしき後見もなければ、こととあるときはなほ拋り所なう、心細げなり。

〔2〕

## 桐壺更衣、皇子を出産

〔1〕前<sup>(一)</sup>の世にも御契りや深かりけん、世にくきよらなる玉<sup>(二)</sup>の男<sup>(三)</sup>皇子<sup>(四)</sup>さへ生まれたまひぬ。いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参<sup>(五)</sup>らせてご覧<sup>(六)</sup>するに、めづらかなる児子<sup>(七)</sup>の御容貌<sup>(八)</sup>なり。

〔1〕の皇子<sup>(一)</sup>は右大臣殿<sup>(二)</sup>の女御<sup>(三)</sup>の御腹<sup>(四)</sup>にて、世のおぼえ重く、疑ひなき儲け<sup>(五)</sup>の君と世人もてかしづきこゆれど、この御匂<sup>(六)</sup>にはならびたまふべくもあらざりければ、大方<sup>(七)</sup>のやんごとなき御もてなしばかりにて、この宮をば私物<sup>(八)</sup>に思しかしづづきたまふこと限りなし。

母君<sup>(一)</sup>は、はじめよりおしなべて内裏<sup>(二)</sup>宮仕<sup>(三)</sup>へしたまふべきにもあらざりき。おぼえいとやむごとなく、上衆めかしくて、わりなくまとはさせたまふあまりに、さるべき御遊び<sup>(九)</sup>の折々をはじめ、何事にもゆゑありよしよしき方には、

〔2〕前世でもお約束が深かつたのだろうか、世にまたとなく美しい、玉のような男皇子さえお生まれになつた。帝はいつ対面できるかと落ち着きにならず、急ぎ立てて参内させてご覧になると、並外れた皇子のお顔だちである。

〔1〕の宮は右大臣の娘である女御がおあげになつた方で、世間からの扱いも重々しく、まちがいなく春宮になられる方だと世間の人々は大切にお世話申し上げているが、この若宮のご美貌にはお並びになるべくもないで、帝は並一通りの丁重なお扱いをされるだけで、この若宮こそ自分だけの大切な子として愛育なされることこの上もない。

若宮の母君は、もとより並々の宮仕えをなさるような方ではなかつた。世の信望を集め、いかにも貴い方のように見え、むやみにお側にお置きになるあまり、しかるべき管弦の御遊びの折々をはじめとして、何事につけても趣があり風情に満

目下世評の華やかなお方たちにもそう劣らず、何事につけてもお取り計らいになるけれども、とりたててしつかりとした後見ないので、大切な行事があるときには、やはり拋り所がなく心細そうである。

「因自悲曰、由此一念又不得居此、復墮下界、且、結後縁。或為天、或為人、決再、相見好合、如舊。(因て、自ら悲しみて曰く、此の一念に由つて、又此に居ること得まじ。復た下界に墮つて、且、後の縁を結ばむ。或るときは天と為り、或るときは人と為るとも、決つて再び、相見て好合すること、舊きが如くあらむ。)」(長恨歌伝)  
二「承歎侍寝無閑暇 春從春遊夜專夜(歎を承け寝に侍して閑かなる暇無し 春は春の遊びに従ひ夜は夜を専らにす)」(長恨歌)

かならず参上まうらせたまふ。あるときには、大殿籠り過ぐし(二)て、やがて留めさせたまふなど、あなたがちに御前去らずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽き方かろにも見えしを、この皇子みこもれたまひて後に心ことに思しあきてたる氣色けしきなれば、「春宮にも、ようせずは、これを据ゑたまつりたまふべきなめり」とささめく人々あるを、一の宮の女御めいはあさましく、胸潰わなづれて、さることもやと思し疑うながへり。人より先に参りたまひて、やんごとなき方かたの御おぼえなべてならず、御子たちもあまたおはしませば、この御方かたの御諫いさめをぞ、すこしわづらはしきことには思しめしける。

ちた催しには必ずお召しになる。あるときには、お寝過ごになり、そのまま次の日もお留めになるなど、周囲の目も気にならず御前から下がらせないお扱いをなさつたので、自然と身分の軽い方にも見えたのだが、この皇子がお生まれになつてからは、帝はご心中で特に決めになつていることがある。ようなので、「春宮にも、ひよつとすると、この若宮をお据え申し上げあそばすおつもりのようだ」とひそひそ言う人々がいるのを、一の宮の母女御はとんでもないことと胸が潰れ、「本当にそのようなことが起ころかかもしれない」と疑念を抱かれている。他の妃たちよりも先に入内なさり、高貴で重々しい立場の方として帝が大切にされることとは格別であり、所生の御子たちも多くいらっしゃるので、このお方が更衣に閑するお振舞いをお諫めするのを、やや煩わしいことだとお思いであつた。

**【3】桐壺更衣、帝寵のために恨みを負う**  
かしこき御蔭みゆきを頼みきこえさせながら、貶め疵きずを求めたまふ人々は多かるに、(二)我身はか弱くはかなきありさまにて、なかなる物思ひをしたまふ人ぞ、いと心苦しげなる。

御局つぼねは桐壺なりけり。あまたの御方々を過ぎさせたま

**【3】かたじけない帝寵をお頼り申し上げなさるもの、蔑み粗を探そうとなさる人々は多く、自身はかよわく憐い様子で、帝寵のためにかえつて心を悩まされる更衣は、じつにお氣の毒な様子である。**

更衣の御局は桐壺であつた。帝は他の多くの妃たちの御局

一「春宵苦短日高起(春の宵苦短くして日高けて起く)」(長恨歌歌)

二「既出水、體弱、力微、若不任羅綺。(既に水より出て、體弱く、力微にして、羅綺にも任ざるが若し。)」(長恨歌伝)

ひつづ、ひまなき御前渡りに、多くの人々の御心を尽くし  
たまふも、げにことわりと見えたり。参上りたまふにも、  
あまりうちしきるときは、ここかしこの馬道、打橋、渡殿  
などやうの道にもあやしきわざをおきつつ、御送り迎へ  
の人の裳、衣の裾、堪えがたくまさなきことどもさへあり。  
ある時には、え避らぬ道の戸を鎖し固めなど、こなたかな  
た御心を合はせてはしたなめ、わづらはしたまふときもあり。

ことにふれて苦しきことのみ数知らずなりませれば、い  
といたう世を思ひわびたるを、いとどあはれとご覽じて、  
後涼殿にもとさぶらひたまふ更衣の局をはかに移させ  
たまひて、上局に賜はす。これにつけても聞きにくき  
ことども多くて、ましてこの恨み、やる方なし。

多くの妃たちが御心をすり減らされるのも、本当にもつとも  
なことと思われる。更衣が帝のもとへ参上される際にも、そ  
れがあり頻繁なときには、あちらこちらの馬道、打橋、渡  
殿などのような通り路にもけしからぬ仕業をしておいて、更  
衣の送り迎えをする女房の裳や衣の裾が堪えがたく不都合な  
さまになることなどさえある。ある時には、どうしても通ら  
なくてはいけない道の戸に錠を下ろしてしまふなど、あちら  
こちらの妃たちが示し合わせてみじめな思いにさせ、お苦し  
めになるときもある。

何かにつけて辛いことばかりが数えきれないほど増えてく  
るので、世間を大変苦しいものと沈みこんでいる姿を、帝は  
いつそう不憫だとご覧になつて、後涼殿にもともといらつ  
しゃる更衣の局を他所へお移しになつて、桐壺更衣の上の局  
としてお与えになる。これにつけても聞き苦しいような誹謗  
などが多く、まして局を移動させられた更衣の恨みは晴らし  
ようがない。

**【4】皇子の袴着の儀**  
この皇子、三つになりたまふ年、御袴着のことあり。  
一の皇子のたてまつりしに劣るけぢめなく、内藏寮、納  
殿の物を尽くして、いみじきよらをさせたまへば、そ  
れにつけてもまた世の誇り多かれど、この皇子のやうやう  
およすけおはする御容貌、ありさま、世にありがたく、め  
づらかるまで見えたまへば、見たてまつるかぎりの人々

**【4】この皇子が三歳におなりになる年に、袴着の儀式が  
ある。一の宮のときに行われた儀式に劣るところなく、内藏  
寮、納殿にある宝を尽くして、たいそう美々しく催される  
ので、それにつけてもまた世間の非難は多いけれども、この皇  
子がだんだんと成長していかれるお顔だちやご様子は世にも  
稀で、常人とは異なるようにさえお見えになるので、拝見す  
る人々は皆、憎みきることがおできにならず、ものの道理を**

はえ憎みあへたまはず、物の心知りたまへる人は、かかる人も世に出でおはするものなりけりと、あさましきまで目を驚かしたまふ。

ご存じの人は、「このような人もこの世にお生まれになるものなのだ」とこちらがあきれるほどに目を見張つていらつしやる。

### 【5】桐壺更衣、病を得て宮中を去る

その年の夏、御<sup>宮</sup>息所<sup>す</sup>はかなき御心地<sup>ち</sup>にわづらひて、ま<sup>(11)</sup>かでなんとしたまふを、暇<sup>いとま</sup>に許させたまはず。年<sup>とし</sup>ごろは常<sup>つね</sup>のあづしさになりたまへば、御<sup>め</sup>目なれて、「なほし<sup>(12)</sup>ばし試みよ」とのみのたまはせて、五六日<sup>(13)</sup>になるに、日々にまさりていと弱<sup>よは</sup>くなりたまひぬれば、母君泣く泣く暇<sup>いとま</sup>奏してまかでさせたまふ。かかる折<sup>(14)</sup>にもあるまじき恥<sup>はぢ</sup>もこそと心遣ひして、皇子をば留めたまつりて、忍びて出でたまふ。

限りあれば、さのみもえ留めさせたまはず。ご覽<sup>らん</sup>じだに

送らぬいぶせさを言ふかたなく悲しと思しめす。いと匂ひやかに美しき人の、いたく面瘦<sup>おも</sup>せて、いとあはれともの思ひしみながら、言<sup>こと</sup>い出でてはきこえず、あるかなきかに消え入りつつ泣きたまふをご覽<sup>らん</sup>するに、来し方<sup>かた</sup>行く末<sup>すゑ</sup>思<sup>おも</sup>はず。われも泣く泣くよろづを契りのたまはすれど、まみなどもいとたゆげにて、なよなよとわれかのけしき色なれば、いかさまにせんと思しまどふ。輦<sup>くわん</sup>車<sup>くるま</sup>の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひても、さらにえ許しやらせたまはず。「限りあらん道にも遅<sup>おそ</sup>先立たじ」とこそ

【5】その年の夏、桐壺の御息所は病を得て弱々しい心地になり、里へ退出しようとなさるが、帝はまったく暇をお許しにならない。ここ数年はご不調が常のことにおなりだつたので、帝はそういう状態に慣れておしまいになつて、「このまま少し様子をみなさい」とだけおつしゃつて、五六日がたつうちに、日を追うごとにひどくなり、たいそうお弱りになると、更衣の母君は涙ながらに退出のお願いを奏上して、里に下がらせなさる。「このような折にとんでもない不名誉があつてはいけない」と気配りして、皇子は宮中にお残しして、ひつそりと退出される。

捷<sup>たて</sup>があるので、帝はそのようにばかりも引き止めることがおできにならない。更衣をお見送りにさえなれない憂愁を言いようもなく悲しいとお思いになる。まこと匂いやかに美しい人が、たいそう面やつれてしまつて、何とも悲しいとしみじみ思ひ入りながらも言葉にしては申し上げず、あるかなきかに消え入りそうになりながらお泣きになるのをご覧になると、過去のことも将来のことも考えることがおできにならぬい。ご自身も涙ながらに様々なことをお約束になるが、目つきなどもひどく力がなく、なよなよとして意識も朦朧として

りつるを、うち捨ててはさりともえ行きやらじ」と言ひもやさせたまはず、むせかへらせたまふ御さまを、女もいみじと見たてまつりたまひて、

「限りとて別る道の悲しきにいかまほしきは命なりけり

いとかう思ふたまへましかば」と息も絶えつゝ、きこえまほしきことはありげなれど、いと苦しげにてむげに消え入るやうなれば、ただかくながら、ともかくもなりはてんをだに見果てんと思せど、修法あまた始むべきこと、さるべき人々うけたまはりたるも、やがてかしこにて今宵よりあらべければ、わりなく思しめしながら、まかでさせたまひつ。

いる様子なので、「いかがしようか」と思い惑われる。輦車の宣旨などを下されても、再び局にお戻りになつても、一向に出発をお許しにならない。「いつと定められてはいるような死出の道にも、後に遺したり先立つたりするまい」と約束したのに、私をうち捨てて、いくらなんでも行つてしまえないと最後までおつしやることもできず、息をつまらせ泣かれるお姿を、女もまことにおいたわしいと拝見なさつて、

これを限りとお別れする死出の道が悲しいのにつけ、私が行きたいのは命の道のほう、生きとうございました。まことにこのように思うことができましたら」と息も絶え絶えになりながら、申し上げたいことはある様子だが、じつに苦しげで今にも消え入つてしまいそうなので、「ただこのまま宮中に留めて、どうなつてしまふかだけでも見届けよう」とお思いになるが、修法を万全に始めるよう、しかるべき僧侶たちが承つており、更衣が着き次第、今晚からあちらで行わることになつてゐるので、やむを得ないとお思いになりながら退出おさせになつたのだつた。

**[6] 桐壺更衣、死去**

御胸つとふたがらせたまひて、その後やがてまどろませたまはず。御使ひの行き違ふほども、なほ心もとなくいぶせきに、明かしかねさせたまふ。夜中過ぐるほどに、「今なん果てさせたまひぬる」とて

帝の御胸はひたと塞がつて、退出後もそのままお眠りにならない。更衣の里に遣わしたお使者が行き来するあいだも、ますます病状が気がかりで鬱々とし、夜を明かしかねていらつしやる。

夜半が過ぎるころ、更衣の里では「今まさにお亡くなりに

泣き騒げば、御使ひもあへなくて帰り参りたるを聞こしめすままで、御心まどひて、何事も思しめされず、いみじく籠りおはします。宮はかくともご覧ぜまほしけれど、かかるほどにさぶらひたまふ例はなきことなれば、まかでたまひなんとす。何事かあらんとも思したらず、御乳母どもも泣きまどひ、<sup>(19)</sup>上も御涙のひまなくておはしますを、あやしと見たてまつりたまふ。

よろしきことだにかかる別れの悲しからぬやうはなきわざなれば、まいて尽きせず、あはれに口惜しげなり。さても言ふかひなれば、例のやうにおさめたてまつる。<sup>(20)</sup>母北の方、「同じ煙にのぼりなん」と泣きこがれて、御送りの女房の車に慕ひ乗りて、愛宕といふ所にいかめしうその作法したる所におはしつきたる心地、げにいかばかりかれりけん。「むなしき御殻を見る見る、なほおはするものとのみおぼゆるがいと悲しければ、灰になりたまはんを見たてまつりて、亡き人とひたふるにも思ひなりなん」とさかしうのたまへれど、車よりも落ちぬべくまどひたまへば、「さは思ひつかし」と人々もてわづらひたてまつる。

内裏より御使ひあり。三位の位贈りたまふ宣命読むを聞くに、悲しきことまたまさりて、限りなく堪へがたし。女御とだに言はせすなりぬるが、あかず口惜しく思されけ

なつた」と泣き騒ぐので、お使者も如何ともしがたく帰參した由をお聞きになるや、御心も惑乱して何事もお考えになれず、ひどく悲しんでお部屋に籠つていらっしゃる。帝は若宮をこのままご覧になつていたいけれども、このような喪中に宮中にはいらっしゃる例はないことなので、若君方は退出なさうとする。若宮は何が起つたともお分かりにならず、御乳母たちも泣きまどい、帝も涙を流してばかりいらっしゃるのを、「どうしたのか」と拝見しておいでになる。

ありふれた場合でさえ、このような別れは悲しくないはずがないのだから、まして悲しみは尽きず、しみじみと残念なさまである。そうは言つてもどうしようもないことなので、常通りに葬り申し上げる。母北の方は、「娘と同じ煙となつて空にのぼつてしまいたい」と泣き慕つて、野辺送りに従う女房の車に後を追つて乗り、愛宕という所でおごそかに火葬の作法をしているところに到着になつた気持ちは、まつたくいしばかりであろう。「魂が離れた御亡骸を何度も見ながら、まだ生きていらっしゃるものとばかり思つてしまふのがまことに悲しいので、灰になられるのを拝見して、もうお亡くなりになつた人だと一心に思い込むようにいたしましよう」と氣丈におつしやるが、車からも落ちてしまいそうなほど惑乱なさつているので、「そのようなことだと思つましたわ」と

「燃えはてて灰となりなん時にこそ人を思ひのやまむ期にせめ」(拾遺集・恋五・929・題しらず・詠み人しらず)

れば、いまひときざみをだにとて、かくせさせたまふなり  
けり。それをも安からず憎みたまふ人々多かりけり。

人々は扱いかね申し上げる。

内裏からお使者がある。お使者が三位の位を追贈する宣命を読み上げるのを聞くと、悲しい思いがひとしおこみあげてきて、この上もなく堪えがたい。女御とさえ呼ばせないままになってしまったのを尽きることなく心残りにお思いになつたので、「もう一階級上の位だけでも」とこのようになさるのだつた。それをも心中穏やかでなくお憎みになる人々が多かつた。

【7】帝や宮中の人々、桐壺更衣を悼む  
すこし物の心知りたまへるは、さま、容貌のめでたかり  
しに添へて、心はせのなだらかに目やすく、憎みどころ。  
なかりしなど、今ぞ思ひ出でたまふめる。さま悪しき御も  
てなしゆゑこそすげなくものしたまひしか、げに人柄のあ  
はれに情け情けしかりし御心など、上の女房どもも恋ひし  
のびあへり。「なくてぞ」とは、これがことにやと見えたり。  
はかなく日ごろ過ぎて、後の御わざなどもこまかに問は  
せたまふ。ほどのふるままに、せん方なく恋しく思しめさ  
るれば、御方々の御宿直なども絶えてしまはず、ただ夜よる  
涙にひちて明かし暮らしたまへば、見たてまつる人々  
さへ露けき秋なり。「なきにつけても人の胸あくまじかり

【7】少しもの的情趣をお分かりになつてゐる方は、更衣のありさまや顔たちのすばらしかつたことに加え、氣立てもおつとりとして感じがよく憎むようななところがなかつたことなどを、今になつて思い出していくつしゃるようである。見苦しいほど度を超したご待遇ゆえにこそ冷淡におなりになつていたが、本当に人柄は親しみがあつて、思いやりが深かつた御心などを、帝のお側近く仕える女官たちも恋い偲びあつてゐる。「なくてぞ」（亡くなつた後こそ恋しい）とはまさにこのことかと理解されるのであつた。

むなしく日数が過ぎて、帝は御法事などにもこまやかに弔問なさる。時間がたつにつれて、どうしようもなく更衣を恋しくお思いになるので、妃たちの夜伽などもまつたくお召し

一 「ある時はありのすさみに憎かりきなくてぞ人は恋しかりける」(源氏乳)

二 「人はいさごとぞもなきながめにぞわれは露けき秋も知らるる」(後撰集・秋中・287・男のもとに遣はしける・読人しらず)

ける人の御おほえかな」とぞ、弘徽殿などにはなほ許しな  
くのたまひける。一の宮を見たてまつらせたまふにつけて  
も、若宮の御恋しさ尽きせず思しめし出でらるれば、した  
くさぶらふ女房、御乳母たちなどを遣はしつつ、御あり  
さまを聞こしめす。

**【8】** 鞍負命婦、桐壺更衣の母君を弔問  
野分してにはかに肌寒き夕暮れに、常よりも思しめし出  
づること多くて、鞍負命婦を遣はす。夕月夜おかしきほど  
に出だしてさせたまひて、やがてながめおはします。か  
やうなる折は御遊びなどせさせたまひしに、心ことなる  
物の音をかきたて、はかなく聞こへさせ出づる言の葉も、  
人にはことなりしけはひ、容貌など、面影に添ひてのみ思  
さるるも、「闇のうつつ」にはなほ劣りけり。  
命婦はかしこにまうでて、門引き入るるより、けはひ  
あはれなり。やもめ住みなれど、人ひとりの御かしづきに

にならず、ただ夜も昼も涙に濡れて、夜を明かし、日中をお  
過ごしになるので、それを拝見する人々までも露に濡れたよ  
うに涙がちになる秋である。「死んだら死んだで、人の心を  
晴れやかにさせないご寵愛だこと」と、弘徽殿などではなお  
も容赦なくおつしやつたそうだ。帝は一の宮を見申し上げな  
さるにつけても、若宮への恋しさを尽きることなくお思い起  
しになるので、気心の知れた女房や御乳母たちなどを更衣の  
里へ幾度も遣わし、近況をお聞きになる。

**【8】** 野分が起こつてにわかに肌寒くなつた夕暮れに、常  
にもまして更衣を恋しく思い出されるので、鞍負命婦を更衣  
の里にお遣わしになる。夕月夜の美しいころに宮中を出発お  
させになつて、そのまま外を見やつていらつしやる。このよ  
うな折は管弦の御遊びなどをおさせになつたものだが、更衣  
はきわだつて優れた音色を奏で、何気なく申し上げなざる言  
葉も、人とは違つた雰囲気や顔立ちなども、幻影として御身  
に寄り添つてゐるかのようにただただ思われてしまふものの、  
それも「闇のうつつ」(現実の更衣)にはやはり劣つている  
のだった。

一 「むばたまの闇のうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり」(古今集・恋三・647・題しらず・読人しらず)  
二 「于時、雲海沈々、洞天日暮。瓊戸、重ねて闇して、悄然として聲無し。方士、息を屏し、足を斂めて、手を門下に拱く。久しく有りて、碧衣、延き入れつ。」  
(長恨歌伝)

とかく目やすきほどなりし住まひを、くれまどひて臥し沈みたまへるほどに、草高くなり、野分にところどころ荒れたる心地して、月影ばかりぞ八重葎にもさはらずさし入りたる。

南面に下ろして母君会ひたまへれど、とみにえものも

のたまはず。「今までとまりてはべるがいと憂きに、かかる御使ひの、蓬の露分け入りたまへるにつけてなん、い

とど恥づかしう」とて、げにえたうまじう泣きたまふ。

「まい参りてはいとど心苦しう、もの思ふたまへられず」など

典侍奏したまひしを、まことに、もの思ふたまへ知らぬ

心地にも、げにこそ忍びがたくはべりけれ」と、ややため

らひて御消息伝へきこゆ。「しばしは夢かとのみたどられ

しを、やうやう思ひしづまるにしも、さむべき夜なく、堪

へがたきはいかさまにすべきこととにかくひあはすべき方

だになきがわりなきに、忍びて参りたまひてかひなき御

物語もなん。若宮のいとおぼつかなく露けき中に過ぐ

したまふらんも心苦しく思しめさるるを、とく參らせたて

まつらせたまへ」など、はかばかしくものたまはせやらず、

むせかへらせたまひつゝ、かつは人の心弱くと見たてまつ

らんことを思ほし、忍ばぬにしもおはしまさぬ御けしきの

心苦しさに、承りもはてぬさまにてなんまかではべり

命婦があちらへ伺つて、車を門の中に引き入れると、邸の様子はしみじみと悲しみに沈んでいる。母君の一人住まいだが、更衣ひとりをお世話するため何かと見苦しくないようになつしやるうちに、庭の草は高くなり、野分にあちこちが荒れた様子で、月の光ばかりが八重葎にも遮られずさし込んでいる。

母君は寝殿の南面で命婦を車から降ろして面会なさるが、すぐには言葉もお出しになれない。「今となるまでこの世に留まつておりますのをまことに辛く存しますし、このようなお使者が、涙に濡れて過ごしている陋屋へいらつしやることにつけても、いつそう恥ずかしく思われまして」と、いかにも堪えがたいようにお泣きになる。「お里へ伺うと一段とおいたわしく、悲しみに何事も考えられません」などと典侍が奏上なさつていましたが、その言葉通り、私のようなもの的情趣を存じません心にも、本当に堪えがたく思われるごと/or>す」と、いくらか気を静めて帝のお言葉をお伝え申し上げる。「しばらくは夢かとのみ途方にくれたが、少しずつ心も落ち着いてくるにつれ、その夢のさめる夜があるはずもなく、堪えがたい思いはどのようにすべきことなのかと相談できる人さえいないのが辛いので、母君にこつそり参内してもらつて

一「とふ人もなき宿なれど来る秋は八重葎にもさはらざりけり」(古今六帖・二・宿・136・貫之)

ぬる」とて、御文ふみたてまつる。  
 「目も見えはべらぬに、かくかしこき仰せ言を光にてな  
 ん」とて見たまふ。

ほど経ばすこしまぎるることもやと待ち過ぐる月日に  
 そへて、いと忍びがたきはわりなきわざになん。いは  
 けなき人もいかにと思ひやりつつ、もろとも(26)育ま  
 ぬおぼつかなさを、口惜しう。今は昔の形見になず  
 らへるものしたまへ。

など、こまやかに書かせたまへり。  
 宮城野の露ふきむすぶ風の音に小萩こはきがもとを思ひこそ  
 やれ

などあれど、えも見はてたまはず。(一)いぢらなか  
 思ふたまへらるるに、(二)まつおも思はんことだに恥づかしう  
 はべれば、まいて百敷もじきに行きかふ人の思ひはべらんことも  
 いとつましうて、かかる仰せ言をおほせりながら、えな  
 ん思ひたまへ立つまじき。若宮わからはいかで思ほし知るにか、  
 参りたまはんことをのみ急ぎ思しためれば、ことわりに悲  
 しく見たてまつりはべる。かやうに内々に思ひたまふるさ  
 まを奏したまへ。ゆゆしき身にはべれば、かくておはしま

他愛ない話もしたいものだ。若宮のことが気がかりで、涙が  
 ちな人々の中でお過ごしであることも不憫と思われるので、  
 はやく参内させられよ』など、はつきりとも最後までおつしゃ  
 らず、むせび泣かれながら、一方では周囲が『お氣弱な』と  
 見申し上げることをお気になさり、ご悲嘆をお隠しにならな  
 いわけでもないご様子のおいたわしさに、すべてを承れない  
 ままで宮中を出てまいりました』と、帝のお手紙をお渡しす  
 る。

「悲しみに目も見えませんが、このように畏れ多い仰せ言  
 を光といたしまして」とご覧になる。

時がたてば悲しみが少しまぎれることもあるうかと待ち  
 ながら過ぎる月日が重なるにつれて、まこと忍びがたさ  
 が募るのは如何ともしがたいことです。幼い若宮もどう  
 しているかと常に気にかかり、共に養育しないもどかし  
 さを口惜しく思いまして。今は昔を思い出すよすがと見  
 なして参内なさつてください。

宮城野(宮中)の私に涙を催させる風の音を聞くにつけ、  
 小萩(若宮)がどのような様子かと案じています。

一「多男子即多懼、富即多事、寿即多辱。(男子多ければ即ち懼多く、富めば即ち事多く、寿なれば即ち辱多し。)」(莊子・外篇・天地)。京  
 都大学蔵本『紫明抄』はこれを引き、「寿即多辱」との訓を示す。  
 二「いかでなほありと知らせじ高砂の松のおもはんことも恥づかし」(古今六帖・五・名を惜しむ・367)

すも忌々しく、かたじけなくなん」とのたまふ。

若宮は大殿籠りにけり。「見たてまつりて、御ありさまも詳しう奏しはべらまほしきを、待ちおはしますらんに、夜更けはべりぬらん」と急ぐ。「くれまどふ心の闇もすこし晴るくばかりなん聞こえさせまほしうはべるを、御わたくしにも、のどかにまかでたまへ。年ごろは、面だたしう嬉しきついでにのみ立ち寄りたまひつるを、かかる御使ひにて見たてまつるは、返す返すつれなき命にもはべるかな。生まれたまひしより思ふ心ありし人にて、故大納言も今際となるまで、「ただ、この人の宮仕への本意、かなならず遂げさせたまへ。われ亡くなりぬとて、口惜しき方に思ひくづほるな」と返す返す諫めおきたまひしか。はかばかしう思ひ後むべき人なき交じらひはなかなかべきことと思ひたまへながら、ただかの遺言違へじとばかりに出だしてはべりしを、身に余るまで御心ばへのかたじけなきばかりに面隠しつつ交じらひはべりつるに、ついに横様なるやうにてかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなん、かしこき御心ばへを思ひきこえさせはべる」と言ひもやらず泣きたまふほどに、いたく更けゆけば、「上もしかなん。

などあるが、とても最後までお読みになれない。「長生きが本当に辛く思われますし、『松の思はんこと』(長寿の松が私に思うであろうこと)さえ恥ずかしいですのに、まして宮中に行き交う人々がどう思いますかも憚られ、このような仰せ言を頂戴しながら、到底思い立てそつにもありません。若富はどのようにご存じになるのでしょう、参内なさることのみをお急ぎでいらっしゃるようなので、それも無理のないことと悲しく拝見しております。このように内心思つておりませることを帝に奏上なさつてください。子に先立たれた不吉な身でございますから、こうして私の側に若宮がおいでになるのも縁起が悪く、畏れ多いことで」とおっしゃる。

若宮はお休みになつてしまつていた。「お目にかかるて、ご様子を詳しく奏上したかつたのですが、主上もお待ちあそばしているでしようし、夜も更けておりましようから」と帰参を急ぐ。「惑乱する心の闇をほんの少し晴らす程度にお話を聞くだけでも結構です。私的にも気安くお訪ねください。ここ数年は、晴れがましく嬉しい折にばかりお立ち寄りくださったのに、このような弔問のお使者として拝見するとは、返す返すも思うにまかせない命でござりますこと。娘はお生まれに

「人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(後撰集・雜一・四〇・太政大臣の、左大将にて相撲の還饗しはべりける日、中将にてまかりて、こと終はりてこれかれまかりあかれけるに、やむことなき人、二三人ばかり留めて、客人、主、酒あまた度の後、酔ひにのりて子供の上など申しけるついでに・兼輔朝臣)

『我わが御心ながらあやしく、人の驚くばかり思されしも、かく長かるまじかりける契りなりけりと、今はつらかりける人となん思ひなす。世にいささかも人の心を曲げたることはあらじと思ひしを、ただこの人のゆゑにてあまたのさるまじき人々の恨みを負ひて、はてにはかくうち捨てられて、心を收めん方なきさまになりゆくも、いかなりける契りにかと、前の世よりゆかしくなん』、うち返しつつ、しほたれがちにてのみなんおはします」など尽きせず語るに、「夜もいたく更けぬれば、今宵過ぐさず御返り奏せん」とて急ぎ参る。

月は入り方近くなりて、空清くのどかなるに、風すこしうち吹きて、草むらの虫惜しみ顔に声々ふりたてたるなど、すべていとたちはなれがたき草のもとなり。

鈴虫の声のかぎりをつくしてもながき夜あかずふる涙かなえも言ひやらず。

「いとどしく虫の音しげき浅茅生に露おきそふる雲の上人

かごとも聞こえつべく」など言はせたまふ。をかしきざまなる贈り物などあるべき折にもあらねば、ただかの御形見

一 「五月雨にぬれにし袖にいとどしく露おきそふる秋のわびしさ」(後撰集・秋中・277・母の服にて里にはべりけるに、先帝の御文たまへりける御返事に・近江更衣)

なつたときから私たちが期待を寄せていた人で、故大納言も臨終の間際まで、『ただ一心に、この人を入れさせるという本懐を、必ず遂げられよ。私が亡くなつたからといって、不本意に諦めてはならぬ』と繰り返しお諫めになつたのでした。しっかりと後見してくれる人のいない宮仕えはかえつて難しかろうと存じましたものの、『ただその遺言を違えまい』との一心で出仕させましたところ、身に余るほどのお情が畏れ多くもありがたいことだけにおすがりして、不如意なことも取り繕つてお仕えしておりましたが、ついに普通でないさまでこのようになくなつてしまいまして、かえつて恨めしいことと、畏れ多いお情をお思ひ申し上げております」と言い終えずお泣きになるうちに、夜もたいそう深くなつていくので、「主上におかれても同じこと。『自分の心でありながら不思議と、人が驚くほどに恋しく思われたのも、このように長続きするはずもない宿縁によるものであつたと、今は恨めしい人だと思うようにする。私は、決してわづかばかりも人の心を損ねたことはないと思つていたが、ただこの人のために、多くの恨ませてはいけない人々の恨みを負い、最後にはこのように先立たれて、心を静めるすべもないようになつていくのも、どのような宿縁だつたのか、前世からのことも知

の装束一くだり、かやうの用もやとて残したまへりける御<sup>二</sup>  
 櫛上げの調度だつ物添へたまふ。  
 若き人々などの悲しきことをばさらにも言はず、内裏わ  
 たりを朝夕にならひて、いとさうざうしく、上の御ありさ  
 まなどを思ひきこゆれば、とく参りたまはなんことをそそ  
 のかしきこゆれど、かく忌々しき身の添ひきこえんもいと  
 人聞き憂かるべし、また、見たてまつらでしばしもあらん  
 はいと後ろめたくおぼえたまへば、すがすがともえ参らせ  
 たまはぬなりけり。

りたいものだ』と繰り返され、ただ涙がちにのみお過ごしで  
 いらつしやいます』など尽きることなく語って、「夜もたい  
 そう更けたので、今夜のうちに返事を奏上しましよう」と  
 急いで宮中に帰参する。

月は入り方近くなり、空は澄み、穏やかで、風がやや吹いて、草むらの虫は名残惜しい様子でその音色をふりしぼつているのなども、すべてがじつに立ち去りがたい草のもとである。

鉢虫のように声のかぎりをつくして泣いても、長い夜でも足りないほどに尽きることなく流れる涙でありますよ。言いおおすことができない。

「虫の鳴き声の頻りな浅茅生に、私もそのように泣き暮らしておりますが、さらに露(涙)を添える、雲上からいらつしやつたあなた様です。

恨み言も申し上げてしまいたく」などと女房にお伝えさせなさる。目を引くような贈り物などをるべきときでもないのでは、ただ御形見の装束一揃いに、このような用途もあるかと残しておかれた御櫛上げの調度のようなものをお添えになる。若い女房などは、悲嘆に暮れていることは改めて言うまで

一 「言訖憫默、指碧衣女、取金釦、錫合、各、折其半、授使者、曰、為我、謝太上皇、謹献是物。尋舊好也。(言ひ訖つて、憫默として、碧衣の女を指して、金釦、錫合を取りて、各、其の半を折つて、使者に授けて、曰く、我が為に、太上皇に謝せまく、謹んで是の物を献まつれ。舊き好を尋よとなり。)」(長恨歌伝)

## 【9】

鞆負命婦、宮中に帰参

命婦は参りて、まだ大殿<sup>おほや</sup>籠らず待ちおはしましけるを、いとあはれに見たてまつる。御前の壺前栽<sup>つぼせんさい</sup>いとおもしろきさかりなるをご覽<sup>ごらん</sup>するやうにしてしのびやかに心にくきかぎりの女房五六人ばかりさぶらはせたまひて、御物語<sup>ものかたり</sup>などせさせたまふなりけり。このごろ明け暮れご覽<sup>ごらん</sup>する長恨歌<sup>ながうめ</sup>の御絵<sup>おゑ</sup>、亭子の院の描かせたまひて、伊勢、貫之<sup>くわんし</sup>に詠ませたまへる大和言<sup>やまとことば</sup>の葉にも唐土の詩をも、ただその筋をぞ真木柱<sup>まことばしゆ</sup>にせさせたまふ。

いとこまかにありさま問はせたまへば、あはれなりつることどもをしのびやかに奏す。御返りご覽<sup>ごらん</sup>すれば、いとも畏<sup>かしこ</sup>きは置<sup>お</sup>き所もはべらず。かかる仰<sup>みたまは</sup>せ言<sup>おほ</sup>事<sup>こと</sup>を承<sup>うけたまは</sup>るにも、かきくらす乱り心地<sup>うち</sup>になん。

もないが、宮中を朝夕に見なれていたので大変心寂しく、帝のお姿などを慕い申し上げるので、早く参内なさるよう急き立て申し上げるが、母君は、このような不吉な身が若宮に付き添い申し上げるのもまったく外聞が悪いに違いない、そうかといって、わずかなあいだでも若宮を拝見せずにはいるのもとても気がかりにお思いになるので、思い切って参内させることがおきにならないのであつた。

【9】命婦は参内して、まだ御寝にならずお待ちでいらっしゃるのを、まことにおいていたわしいことと拝見する。御前の壺前栽がたいそう趣深いさかりなのをご覧になつてゐるふうにして、ひつそりと、奥ゆかしい女房ばかりを五六人ほど伺候おさせになつて、語らつていらつしやるのだった。近ごろ朝夕にご覧になつてゐる長恨歌の御絵——亭子の院がお描かせになり、伊勢、貫之にお詠ませになつた和歌をも漢詩をも、ただそのような趣向のものを心の拠り所となさつてゐる。たいそう詳しく里の様子をお尋ねになるので、命婦はしみじみと悲しかつたことなどをひそやかに奏上する。

母君からのお返事をご覧になると、大変畏れ多いお言葉を賜り、どうすればよいか分かりかねております。このようない仰せ言を承るにつけましても、

参考歌「真木柱つくる袖人いさくめの仮庵のためと思ひけんやは」(古今六帖・二・袖・107)。岩坪健(2013)は『源氏絆』が他の巻の注記で使用する「わぎもこが来てはよりたつ真木柱そもそもむつましきゆかりと思へば」などを踏まえて「ゆかり」と解釈する。

あらき風ふせぎし影のかれしより小萩がもとぞ静

心も真つ暗に思い乱れておりまして。

世間の荒い風をふせいでいた木(娘)が枯れて木影

(庇護)がなくなつてからというもの、木のもとに

す。いとかくしも人には見えじと思しづめたれど、さら

にえ忍びあへさせたまはず。

ご覧じはじめし年月の事・

などやうに乱りがはしきを、心の收(35)をさまらぬほどとご覧じ許

す。いとかくしも人には見えじと思しづめたれど、さら

にえ忍びあへさせたまはず。

御(らん)覽じはじめし年月のことさへ、かき集め思ほしつづけ

られて、時の間だにおぼつかなかりしを、かくても月日は

経けりと、あさましう思しめざる。「故大納言の遺言違へず、

宮仕への本意深くてものしたりし喜びは、かひあるさま

にとこそ思ほしわたりつれ、言ふかひなしや」とのたまは

せて、いとあはれと思しやれり。「かくとも、おのづから、

若宮など生ひ出でたらばるべきついでもありなん。命(いのち)

長くとこそ思ひ念ぜめ」などのたまはす。

まらない頃なのだとお見逃しになる。帝は、「ここまで惑乱してゐる姿を人には見られまい」と心を落ち着かせようとなさるが、とてもこらえきることがおできにならない。

入内した当初のことまでもあれこれと思い起こされて、「わ

ずかな間でさえ会わないのでもどかしかつたのに、更衣がい

なくとも月日は過ぎるものであつた」と思いがけないことと

お思いになる。「故大納言の遺言を違えず、宮仕えの志を遂

げてくれた感謝のしるしに、『その甲斐があつたと喜んでく

れるように』と思いつづけていたが、今となつては詮のない

ことよ」とおっしゃつて、母君をたいそう痛ましくお思いにならる。

「そうであつても、若宮が成長すれば自然としかるべき機会もあるう。『そのため長生きしよう』と思つて耐えてほしい」などとおっしゃる。

【10】帝、長恨歌によそえて桐壺更衣を哀惜  
この贈り物を御覧せざするにも、亡き人の在り処たづね  
出でたりけんしるしの釵ならましかばと思さるるも、い  
とかひなし。

たづねゆくまぼろしもがなつてにても魂のありかをそ  
こと知るべく  
絵に描きたる楊貴妃はいみじき絵師といへども、筆かぎり  
ありければ、いと匂ひ少なし。尾花の風になびきたるより  
もなよび、撫子の露に濡れたるよりもなつかしかりし  
容貌、けはひを思ほし出づるに、花鳥の色にも音にもよそ  
ふべき方ぞなき。朝夕の言ぐさに「羽を並べ、枝を交は  
さん」と契らせたまひしに、誰もかなはざりける命のほ  
どぞ尽きせず恨めしき。

(四かせ)  
風の音、虫の音につけても、もののみ悲しく思しめざる  
るに、弘徽殿、世の中ものもつかしく思されて上の御局

【10】命婦がこの贈り物をお目にかけるにつけても、「亡き人の居場所を探し出したという証の釵であつたならば」とお思いになるのも、まったく甲斐のないことである。  
亡き人の魂を探しに行く幻術士がいればよいのに。人伝てにでも、あの人魂のありかをそこと知ることができ  
るようだ。

絵に描いてある楊貴妃は、優れた絵師であつても筆で描くことには限りがあつたため、じつに精彩を欠いている。尾花が風になびいているさまよりもなよびやかで、撫子が露に濡れているさまよりも慕わしかつた更衣の顔立ちや様子を思い出されると、花の色や鳥の音をもつてしても喻えようがない。朝夕の口癖に、「比翼の鳥のように羽を並べ、連理の枝のよううに枝を交わそう」とお約束なさつたのに、誰にとつても思うにまかせないものであつた天命こそが、尽きることなく恨めしい。

一 「言訖憫默、指碧衣女、取金釵、鉢合、各、折其半、授使者、曰、為我、謝太上皇、謹献是物。尋舊好也。(言ひ訖つて、憫默として、碧衣の女を指して、金釵、鉢合を取りて、各、其の半を折つて、使者に授けて、曰く、我が為に、太上皇に謝せまく、謹んで是の物を献まつれ。舊き好を尋よとなり)」(長恨歌伝)

二 「在天願作比翼鳥 在地願為連理枝(天に在りては願はくは比翼の鳥作らむ 地に在りては願はくは連理の枝為らむ)」(長恨歌)

三 「此恨綿無絶期(此の恨みは綿々として絶ゆる期無けむ)」(長恨歌) なお、那波本では「無尽期」とする。  
「梨園弟子、玉瑠、音發聞霓裳羽衣一聲、則天顔、不怡。左右、歎歎。(梨園の弟子、玉瑠、音を發す。霓裳羽衣の一聲を聞きては、則天顔怡しひたまはず。左右、歎歎す。)」(長恨歌伝)

にも参<sup>まつ</sup>上<sup>は</sup>りたまはず、月のおもしろきに遊びをぞしたまふ。なる。帝<sup>(40)</sup>、いとすさまじと聞かせたまふ。このごろの御<sup>(41)お</sup>けしきを見たてまつる上人、女房など、かたはらいたしと聞<sup>き</sup>けり。いと押<sup>お</sup>したち、かとかどしくものしたまふ御方<sup>(42)かた</sup>にて、ことにもあらず思<sup>おも</sup>し消<sup>け</sup>ちてもてなしたまふなるべし。

月も入りぬ。

雲<sup>くも</sup>の上<sup>は</sup>も涙<sup>なみだ</sup>にくるる秋の月いかですむらん浅茅生<sup>あさちぶ</sup>の宿<sup>やど</sup>

思<sup>おも</sup>ほしやりつつ、(1)灯火をかかげ尽<sup>つく</sup>しておはしますに、右近の司<sup>つかさ</sup>の宿直奏<sup>ゆきふね</sup>の声<sup>こゑ</sup>聞<sup>き</sup>こゆるは、丑<sup>うし</sup>になりぬるなるべし。

人目<sup>ひとめ</sup>を思<sup>おも</sup>しめして、夜の御殿<sup>ごと</sup>に入<sup>い</sup>らせたまひぬれど、まどろませたまふこといとかたし。朝<sup>あした</sup>に起きさせたまひても、「明くるも知らで」と思<sup>おも</sup>ほし出<sup>い</sup>づるに、なほ朝政<sup>(43)あさのわい</sup>は怠りぬべかめり。ものなども聞<sup>き</sup>こしめさず、朝餉<sup>(44)あさぐい</sup>のけしきばかり触<sup>おさ</sup>れさせたまひて、大床<sup>(45)たいしゆう</sup>子<sup>こ</sup>の御膳<sup>ごぜん</sup>などはいとはるけくのみ思<sup>おも</sup>ほしめしたれば、陪膳<sup>(46)たいせん</sup>にさぶらふ人々など、いと心苦<sup>くる</sup>しう見たてまつり悩<sup>なや</sup>む。

月も沈んだ。

雲の上(宮中)でも、涙にくれて見えない秋の月だ。ましてどうして澄んで見えようか、どんなに嘆いて住んで

いるだろうか、あの浅茅生の宿(更衣の里)では。

思いを馳せながら、灯芯<sup>ひな</sup>をかきたてて尽<sup>つく</sup>きるまで起きておられると、右近衛府の宿直奏<sup>ゆきふね</sup>の声が聞こえてくるのは、丑の刻になつてしまつたに違ひない。人目を憚つてご寝所にお入りになつたものの、うとうとなさることはじつに難しい。

朝お起きになつても、「明くるも知らで」(更衣と夜が明け

風の音、虫の音につけても、無性に悲しくお思いになら<sup>あた</sup>れているが、弘徽殿女御は帝とのご関係を煩わしく思われて上の御局にも参上なさらず、月が美しいのによせて管弦の遊びをなさつてゐるようである。帝はひどくご気分を害してお聞きになる。近ごろの帝のご様子を拝見している殿上人や女房などは、苦々しく聞いてゐるのであつた。弘徽殿女御は大変我が強く、險がおありのお方なので、帝のお嘆きを些末なことと無視してふるまつていらつしやるらしい。

一 「秋燈挑尽未能眠(秋の燈<sup>とも</sup>が挑<sup>あ</sup>げ尽して未だ眠<sup>ね</sup>ること能はず)」(長恨歌)

二 「玉すだれ明くるも知らで寝しものを夢にも見じとゆめ思ひきや」(伊勢集・55・長恨歌の屏風を亭子院の帝描かせたまひて、その所々詠ませたまひける 帝の御にして)。先に出た宇多天皇の長恨歌絵のため、「春の宵苦短くして日高けて起く」(長恨歌)をもとに詠まれた歌。

三 「春宵苦短日高起 従此君王不早朝(春の宵苦短くして日高けて起く これより君王早朝したまはず)」(長恨歌)

すべて近くさぶらふかぎりは、男女、「いみじきわざかな」と言ひ合はせつゝ嘆く。「さるべきにこそおはしますらめ。多くの人の誇り恨みを憚らせたまはず、この御方に片寄りたることは道理を失はせたまひしに、今はかく世の政<sup>まつりご</sup>をも思しめし棄てたるやうになりゆくは、いと絶え絶えしきわざかな」、他の朝廷の例かき集め、ささめき嘆きけり。

**[1]** 一の宮、立坊する 桐壺更衣の母君の死  
月日経て若宮参りたまへり。いとこの世のものにもあらず、きよらに生い成りたまへれば、ゆゆしと思しめしたり。あくる年の春春宮定まりたまふにも、いと引き越さまほしう思しめせど、御後見すべき人もなく、世の中にも受けひくまじきこととなれば、なかなか危ふく思しめしなりぬるを、「さばかり思しめしながら、限りこそありけれ」と、女御も御心落ちたまふ。世人も聞こゆ。かの祖母北の方、慰む世なく思し沈みて、おはしにけ

るのも知らず共に寝過ごしたもの)を)と思ひ出されては、やはり今も朝のご政務をおろそかになさつてしまつようである。お食事も召し上がるらず、朝餉にはほんのしるし程度にお手をつけるだけで、大床子の御膳などはほど遠い存在のようばかり思し召されるので、陪膳に伺候する人々などは、まことに心苦しく拝見して心を痛めている。帝のお側近くお仕えする人々は皆、男も女も、「ひどいご状態よ」と言い交わして嘆いている。「きっとそのようなご命運でいらつしやるのだろう。多くの人の非難や恨みを憚られず、このお方ばかりに心を寄せて道理を失われてしまつたのに、今は今でこのようにご政務をもうち棄てあそばすようになつていくのは、本当に今にも政治が途絶えてしまいそうな状態であるよ」と、他国の朝廷の例をあれこれ取り集め、陰で嘆いているのであつた。

**[1]** 月日が経つて、若宮が参内なさつた。まったくこの世のものではないかよう美しく成長なさつたので、帝はそら恐ろしいと思し召される。  
翌年の春、一の宮が春宮にお決まりになる際にも、順番を飛び越して若宮を立坊させたくお念じになるが、後見をつとめるべき人もなく、世間でも承服するはずのないことなので、かえつて危ういとのお考えに至られたのを、「あれほどお可愛がりになりながらも、やはり決まりというものがあつたのだ」と、弘徽殿女御も御心を落ち着かせられる。世間も同様

んかたにゆかんと願ひたまふしるしにや、つひに失せたまひ  
ねれば、またこれを思し嘆きけることかぎりなし。宮は六  
つになりたまふ年なれば、このたびは思し知りて、いみじ  
う恋ひ泣きたまふ。年ごろ馴れきこえたまへるを、見たて  
まつり置く悲しさをぞ、のたまひける。

にお噂申し上げる。

あの若宮の祖母でいらっしやる北の方は、心を慰める機会  
もなく沈みこまれて、「亡き更衣がいらっしやるところへ行  
こう」と願われたためだろうか、とうとう亡くなってしまわ  
れたので、帝はまたこのことを限りなくご悲嘆なさった。宮  
は六歳におなりになる年なので、今回のご逝去は理解なさり、  
たいそう慕つてお泣きになる。北の方は死に際し、何年もお  
親しみ申し上げなさつた若宮をお残しする悲しさを、口にな  
さつたのだつた。

【12】若宮、妃たちに親しむ  
今は内裏にのみさぶらひたまふ。七つになりたまへば、  
御書始などせさせたまひて、世に知らず聰く賢くおはす  
れば、あまり恐ろしきまで「御覽」<sup>（48）</sup>す。  
今は誰も誰もなにかは憎みきこえたまはん。母君おはせ  
ねば、かく類なき御さま、容貌をみなあはれがり、らう  
たきものにて聞こえたまふ。

弘徽殿などにも渡らせたまふ御供にて、やがて御簾の中  
にも入れたてまつらせたまふ。いみじき武士を敵にて持も  
たまへりとも、まづ見ては心やはらぎぬべきさましたまへ  
れば、えさし放ちきこえたまはず。女宮たちも一一ところさ

今となつては、どなたにおかれても、どうしてお憎み申さ  
れようか。母君がいらっしやらないので、このように類なく  
美しいお姿や顔だちに皆心打たれ、愛おしい方とお思い申し  
あげられる。

帝が弘徽殿などへお渡りになる際のお供として、そのまま  
御簾の中にもお入れ申し上げなさる。恐ろしい武士を敵とし  
ていよるとも、何はさておき、若宮を見ると心がなごんでし

一 「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の仲をもやはらげ、たけき武士の心をも慰むるは歌なり」(古今集・仮名序)

し並びおはしますに、なすらひたまふべき方なきぞ、いと  
口惜しかりける。

いづれの御方々もえ隠れあへたまはず、みな見えたてま  
つりたまふに、今よりいみじうなまめかしいう恥づかしげに  
おはすれば、いとをかしう打ちとけぬ遊びがたきにぞ、み  
な思ひきこえたまへる。わざとの御学問をばさるものにて、  
はかなき琴笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひつづけば  
いとことごとしく、ただ者にもあらず聞こえぬべき御あり  
さまになんおはしける。

**[13] 高麗の相人の觀相**  
 そのころ、高麗人の參りたりける中に、かしこき相人の  
ありけるを聞こしめして、宮の内に召さんは宇多の帝の  
御諫めありければ、いみじう忍びやつして、この皇子を鴻  
臚館に遣はしたり。御後見だちて仕うまつる右大弁の子  
のやうに思はせて、率てたてまつる。  
 相人驚きて、あまたたび傾きあやしがる。「國の親と  
なりて、いとその上なき位にのぼるべき相おはします人の、  
その方につけでは乱れ憂れふることやあらん。おほやけの  
固めとなりて天下をたすくる方に見れば、その相違ふ」

**[13]** そのころ、高麗人が來朝していた中に、才知ある相  
人がいたのを帝はお聞き及びになり、宮中へお召しになるの  
は宇多の帝のご訓戒があつたので、たいそうこつそりと目立  
たないようにして、この皇子を鴻臚館にお遣わしになる。ご  
後見のようにお仕えしている右大弁の子ということにして、  
お連れ申し上げる。

相人は驚いて、幾度となく首を傾げていぶかしがる。「國  
の親となつて、まこと至上の位にのぼるべき相でいらっしゃ  
る人ですが、そういつた方として見ると、國が乱れて憂慮す  
ることがありますよ。朝廷の要となつて国政を補佐する

まうにちがいない様子をしていらつしやるので、突き放し申  
すことがおできにならない。弘徽殿女御には姫宮たちもお二  
方いらっしゃるが、この若宮に肩を並べられそうな美質のな  
いのことを、まことに残念にお思いであつた。  
 どちらの方々も隠れとおすことがおできにならないで、若  
君をはつきりと拝見なさると、もう今の時分からすばらしく  
氣品があり、こちらが氣恥ずかしいほど優れていらつしやる  
ので、まことに立派で氣の張る遊び敵だと、どなたもお思い  
申し上げていらつしやる。正式なご学問はもちろんのこと、  
ちよつとした琴笛の音でも雲居を響かせ、そのご才能をすべ  
て並べていけばじつに仰々しくなってしまうほど、普通の方  
ではないよう申し上げなければならないご様子でいらつ  
しゃつた。

と申す。

弁も才かしこき博士にて、言ひかはしたことどもなん  
興ありける。文など作りかはして、今日明日帰りなんとするに、かくめづらしくありがたき人に会ひてまつりたる喜び、かへりては悲しかるべきことの心ばへをおもしろく作りたるに、皇子もあはれなる句を作りたまへるを、かぎりなく愛でたてまつりて、いみじき贈り物どもを捧げたまつる。朝廷よりも多くの物ども賜はせけるを、漏らさせたまはねど、おのづから言広ごりて、春宮の祖父大臣など聞きたまひて、いかなることにかと思し疑ひてなんありける。

【14】帝、若宮の臣籍降下を決定  
帝、かしこき御心に大和相に思し仰せたることありければ、今までこの君を親王にもなさせたまはざりけるを、相人はまことにかしこかりけりと思しめし合はせて、無品の親王の外戚の寄せなきにては漂はさじ、わが御代もいと定めなきを、ただ人にて朝廷の御後見するなん、行く末も頼もしげなると思し定めて、いよいよ御学問をせさせたまつりたまふ。道々の才をならはさせたまふに、際ごとにて、ただ人にはいとあたらしけれど、親王におはせば世の疑ひ負ひぬべくものしたまへば、宿曜のかしこき道にも勘へさせたまふに、ただ同じさまにのみ勘へ申せ

方として見ると、その相も違っています」と申し上げる。  
右大弁も漢才ゆたかな博士なので、相人と言い交わしたことは興趣があつた。詩などを作り交わして、相人は今日明日にも帰国しようとするときにこのように世にも稀なすばらしい人にお会いできた喜びと、そのためにかえって帰国が悲しくなるにちがいないという趣旨を見事な詩にすると、皇子も琴線に触れる句を作りになるのを、この上なくお褒め申して、すばらしい贈り物を献上する。朝廷からも相人へ多くの品々をお与えになつたのを、帝は言外なさらなが、自然と噂は広がり、春宮の祖父である右大臣などがお聞きになつて、「どのようなことなのか」と疑念を抱いていらつしやるのだつた。

【14】帝は畏れ多い御心によつて、大和相に仰せつけていらっしゃることがあつたので、今までこの若宮を親王にもおさせにならなかつたのを、「相人はまことに聰明である」とお考えあわせになられ、「無品の親王で外戚の後ろ盾がないといった不安定な世渡りはさせまい。私の治世もいつまで続くか分からぬのだから、臣下として朝廷のご後見をするこそ将来も安泰というものだ」と決心なさつて、ますます学問をおさせ申し上げなさる。さまざま学問をお学ばになると、それらのご才能は一際抜きんでて、臣下にはじつに惜しいのだが、親王でいらつしやると世間からの疑いを負うに違ひない様子でいらつしやるので、宿曜という優

ば、源氏になしててまつらせたまふべく思しおきてたり。

【15】前帝の四の宮、入内して藤壺女御となる。

年月にそへて、御<sup>宮</sup>息所の御<sup>争</sup>こと思し忘るるときなし。慰<sup>なぐさ</sup>むやとさるべき人々を参らせてご覧<sup>らん</sup>するにも、なづらひにだに思しめざるべきもなく、ありがたき世なりければ、もの憂くのみ思しむすばほれたり。

前帝の四の宮の、御容貌すぐれたる名高くおはしますを、母后<sup>は</sup>なくかしづきたてまつりたまひけり。上にさぶらふ典侍<sup>なしきすけ</sup>、前帝の御時の人にて、かの宮にも親しく参りければ、小さくおはしましける御時より見たてまつり、今もほの見たてまつりて、「失せたまひにし御息所の御容貌になずらはせたまへる人を、三代の宮仕へつかうまつりつるに、え見たてまつりはべらぬを、后<sup>ご</sup>の宮の姫宮こそいとよくおぼえて生ひ出でさせたまへれ。類<sup>たぐひ</sup>ありがたき御<sup>み</sup>容貌なり」と奏しけるを聞こしめして、まことにやと御心とまらせたまへば、参らせたてまつらせたまふべき由ねんごろに聞こえたまひけるを、母后<sup>は</sup>、「あな恐<sup>おそれ</sup>しや。春宮の女御の御心いとさがなくて、桐壺<sup>きりは</sup>の御息所もいとはかなくもてなされにけり。例もゆゆし」と思しつつみて、すがすがとも思したたぎりけるほどに、后失せたまひぬ。「心細くおはしますらむを、ただ女御子たちの同じ<sup>おな</sup>列に思ひきこえん」とせちに聞こえたまへば、さぶらふ人々、御

れた道にも判断おさせになると、ただ同じようにのみ判じ申すので、源氏にしてさしあげるようお取り計らいになった。【15】年月が経つにつれていますます、帝は御息所のことをお忘れになるときがない。「心が慰められようか」としかるべき人々を入内させてご覧になるが、更衣と比較することするできそうな方もなく、あのような人はめつたにおられない世があるので、ただ鬱々と沈みこんでいらつしやる。

前帝の四の宮で、美貌の評判が高くていらつしやる方を、母后がまたとなく大切にお育て申し上げていらつしやつた。

帝にお仕えしている典侍が、前帝の御代の人で、その宮にも親しく参上していたので、幼くていらっしゃつたころから拝見し、今もほのかにお見かけして、「お隠れになつた御息所のお顔はせに肩をお並べになる人を、三代の帝にお仕えしましたものの拝することがかないませんでしたが、后の宮の姫

宮こそ、まことに御息所を髣髴とさせるようご成長あそばしました。まつたく稀なるご美貌です」と奏上したのをお聞きになつて、「まことだらうか」と御心をとめられたので、入内させ申し上げなさるよう熱心にお申し入れになつたのを、

母后は「まあ、恐ろしい。春宮の母君の女御は性格にたいそう難があつて、桐壺の御息所もまつたく取るに足らないよう<sup>う</sup>に扱われたとか。その例も不吉なことです」と躊躇<sup>ちよ</sup>われて、はつきりとご決意なさらないうちに、その母后はお亡くなりになつてしまつた。「心細くいらつしやるだらうから、ただ

後見たち、御兄人の兵部卿宮など、「げに、かくつれづれとおはしまさむよりは、内裏住みもしたまひて御心もやれかし」など定めたまひて、参らせたてまつらせたまひてけり。

御局は藤壺なり。御容貌、ありさまは、聞こしめししに違はずめでたきにそへても、げにあやしきまでぞおぼえてまひける。これは人の御ほどもまさり、思ひやりめでたくて、誰もえ贬めきこえたまはねば、うけばりてあかぬことなし。かれは人の許し申さざりしに、御心ざしはあやにくなりしそかし。思し移るとはなけれど、おのづからまぎれて、昔の恋しさこよなく慰ませたまふも、あはれなるわざなりけり。

私の皇女たちと同様にお思い申し上げるつもりです」と熱心に申し上げなさるので、姫宮にお仕えしている女房、ご後見の人々、御兄弟の兵部卿宮などが「まことに、このように寂しくお過ごしになるよりは、内裏にお住まいになつて気をお晴らしなさいませ」などとお決めになつて、入内させ申し上げられた。

御局は藤壺である。お顔だちや姿は、帝がお聞きになつていたことと違わずすばらしいのに加え、本当に不思議なまでに更衣の面影に似通うとお感じになるのだった。このたびの方は身分も高く、思慮深くて、どなたも見下し申すことがおできにならないので、気兼ねなく振る舞われてご不満なことがない。あの桐壺更衣は世間がお許し申なかつたのに、ご寵愛は不都合なほど深かつたことよ。お気持ちが移るというわけではないが、自然と気が紛れ、亡き更衣への恋しさが特別お慰みになるのも、感慨深いことなのだつた。

**[16] 源氏、藤壺女御を慕う**

源氏の君は御あたり避けさせたまはねば、しげく渡らせたまふ御方には、ましてえ隠れあへたまはず。いづれの御方も、われ人に劣らむと思したる人やはある、とりどりにいとめてたくおはすれど、みな大人びつつものしたまふ御中に、いと若う美しげにて、せちに隠れたまへど、朝夕にさぶらひたまへば、おのづから漏り見たてまつらせたまふに、母御息所は影だにおぼえたまはねに、「これなん、

**[16] 源氏の君は帝のお側をお離れにならないので、帝がたびたびお渡りになるお方におかれでは、まして隠れきることがおきにならない。どちらの妃たちも、「私は人に劣つてゐるだろう」と思う人がいるだろうか、各々まことに美しくていらつしやるが、皆お年を重ねていらつしやる中にあつて、藤壺女御はじつに若くて可愛らしく、ことさらお隠れになるけれども、源氏の君は朝夕に帝のお側にいらつしやるので、自然とちらりと拝見なさると、母君の御息所のことは面**

いとよう似たてまつらせたまへる」と典侍の聞こえけれども、若き御心にいとあはれと思ひきこえて、常に見たてまつらまほしう、なづさひまあらせばやとぞおぼえたまふに、上もかぎりなき御思ひどちにて、「な疎みたまひそ。あやしくよそへきこえつべくなんある。なめしと思さで、らうたくしたまへ。面つき、まみなどのいとよく似たりし人ゆゑ、通ひきこえためるも似げなからず」など常に聞こえつけつも、をかしきさまなるをば心ざしなどこよなく心寄せきこえたまへば、弘徽殿またこの宮とも御仲らひうるはしからず、そばそばしきゆかりに、もとよりの憎さうちそひて、いとものしと思したり。

世に類なくをかしと見たてまつらせたまひ、名高くおはする女御の御容貌も、なほこの君の匂はしさはまさりて、美しげなることたごん方なきを、世の人、「光る君」と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おぼえもとりどりなりて、「かかやく日の宮」とぞ聞こゆめりし。

源氏の君がまこと類なくそばらしいと拝見なさり、名高くていらつしやる藤壺女御のご美貌にも、さらにこの君の照り映えるような美しさはまさついて、愛らしいことは喻えようもないでの、世間の人々は「光る君」とお呼びする。藤壺女御もこれに肩をお並べになつて、ご帝寵もそれぞれにめでたいとして、「輝く日の宮」と申し上げるようであつた。

## 【17】源氏、元服する

この君の御童姿いと変へまうく思せど、十二になりたまふ年、御元服のことあり。帝よろづに居たち思し營みて、かぎりあることにことをそへ、いみじきけうらを尽くさせたまふ。一年、春宮の御元服、南殿にてありし儀式のよそはしさに劣らせたまふことなし。ところどころの饗、内藏寮、穀倉院などやうのおほやけごとに例の疎かに仕ふまつることどもも、とりわきたる仰せ言ありて、みなおのおきよらを尽くしたり。

おはします殿の東の廊に東向きに御倚子たてて、引入の大臣の御座、御前にあり。時なりて、源氏参りたまふ。鬢結ひたまへる面つき、顔の匂ひ、さま変へたまほんこと惜しげなり。大藏卿、藏人仕ふまつる。いときよらなる御髪を削ぐほど、心苦しげなり。上は、御息所の見ましかばと思し出づるに堪へがたきを、心強く思しかへす。冠したまひて、御休み所にまかでたまひて、御衣たてまつり变へて、下りて拝したてまつりたまふさまを、みな人涙落としたまふ。帝はましてえ忍ばせたまはず、思し忘るる折もありつる昔のことも、とりかへしいと悲しく思さる。いとかくきびはなるほどは上げ劣りもや、と疑はしく思しつるを、まためづらかにあさましき美しさそひたまへり。

引入の左大臣、皇女腹にただ一人いつきたまふ御娘、

【17】帝はこの君の童形のお姿を少しも変えたくないと思ふが、十二歳におなりの年、ご元服が行われる。帝はあらゆることを熱心に采配なさって、定められた儀式をさらに豪華にし、大変に華美を極められる。前年、春宮のご元服が南殿で行われたときの儀式の壮麗さに引けをお取らせになる点がない。各所で行われる饗で、内藏寮や穀倉院などのようなところが公的行事の決まり通りにいつもはなおざりにご調進するものなども、今回は特段のご指示があつて、皆各自が善美を尽くしている。

帝がおいでになる清涼殿の東廊に東向きに御倚子を置き、引入の大臣の御座は帝の御前にある。定刻になつて、源氏が参上なさる。角髪をお結いになつている面ざしや顔の輝くような美しさは、大人の姿になられるのが惜しいさまである。大藏卿が理髪をご担当する。まことに美しい御髪を削ぐのは心苦しい様子である。帝は、「御息所が見たならば」とお思い起こしになると堪えがたいものの、気を強くお持ちになる。

君は加冠の儀を終えられて、ご休憩所に退出なさり、大人のご装束にお召し替えして、東庭へ降りて拝舞なさる姿に、皆涙を落される。まして帝は涙をこらえることがおできにならず、お忘れになる折もあつた昔のことも、今改めてひどく悲しくお思いになる。「このようにほんの幼い年頃では大人の姿で見劣りすることもあるうか」と疑わしく思われていたが、また世にも稀な、驚くばかりの美しさがお加わりになつ

春宮より御けしきあるを、思しわづらふことありける、この君にたてまつらんの心深きなりけり。上に御けしき賜酒など見るほど、親王たちの御座の末に源氏の君についたまへり。大臣、けしきばみたまふことあれど、もの恥づかしくてともかくもあひしらひたまはず。

御前より、内侍、宣旨承り伝へて、大臣参りたまふべき召しあれば、参りたまふ。禄の物、上の命婦取りてまゐれり。白き大袴、御装束一くだり、例のことなり。

御盃(はつ)のついでに、いとけなき初(はじ)もとゆひにながき世をちぎる心は結びこめやへありて驚かさせたまふ。

と奏したまひて、長橋より下りて舞踏したまふ。左馬寮の結びつる心も深きもとゆひにこきむらさきの色しあせと御馬、藏人所の御鷹据ゑて賜りたまふ。御階のもとに親王たち上達部つらねて、禄ども品々賜りたまふ。

その日の御前の檜割子、折櫃物など、右大弁なん承りて仕ふまつらせける。屯食、禄の唐櫃などところせきまで、春宮の御元服のよりも数まさりて、なかなかかぎりもな

らせたまひければ、御けしきよくて、「さらばやがて、この折の後見なかもるを、添臥にも」ともよはさせたまひければ、さ思ほしたり。殿上にまかでたまひて、人々大御酒など見るほど、親王たちの御座の末に源氏の君についたまへり。大臣、けしきばみたまふことあれど、もの恥づかしくてともかくもあひしらひたまはず。

御前より、内侍、宣旨承り伝へて、大臣参りたまふべき召しあれば、参りたまふ。禄の物、上の命婦取りてまゐれり。白き大袴、御装束一くだり、例のことなり。

御盃(はつ)のついでに、いとけなき初(はじ)もとゆひにながき世をちぎる心は結びこめやへありて驚かさせたまふ。

と奏したまひて、長橋より下りて舞踏したまふ。左馬寮の結びつる心も深きもとゆひにこきむらさきの色しあせと御馬、藏人所の御鷹据ゑて賜りたまふ。御階のもとに親王たち上達部つらねて、禄ども品々賜りたまふ。

その日の御前の檜割子、折櫃物など、右大弁なん承りて仕ふまつらせける。屯食、禄の唐櫃などところせきまで、春宮の御元服のよりも数まさりて、なかなかかぎりもな

た。

加冠役の左大臣が、皇女との間にもうけて愛育なさつている一人娘、この姫君には春宮から入内のご希望がありながらも、それを渋つていらつしゃつたのは、この君にさしあげようという志が深いためなのだ。帝にご内意をお伺いになると、贊意を示されて、「それならば元服の日にそのまま、これにあたつての後見もないようだから、添臥に」と促されたので、左大臣もそのおつもりでいらつしやる。殿上の間のご休憩所にご退出され、人々がご下賜のお酒を召し上がつてゐるときに、親王たちの御座の末席に源氏の君がおつきになつた。左大臣がご結婚のことを探のめかされるが、気恥ずかしくて何ともお答えにならない。

帝から、内侍が宣旨を承つて伝えることには、左大臣が御前へ参られるようお召しがあるので、参上なさる。禄の品は帝付きの命婦が取り次いで、さしあげる。白い大袴、ご装束一揃いという、通例のものである。帝は御盃を賜る際に、幼い源氏の君が初めて結った元結に、あなたの姫君との末長い関係を誓う心も共に結びこめたのか。

ご意向をこめて念をお押しになる。

結びこめた私の志も深い元結でござりますから、元結の紐の濃い紫色(源氏の君の御心)さえ変わりませんでし

たら、末長く。

と奏上なさり、長橋から降りて拝舞される。左馬寮の御馬、

くいかめしうなんありける。

【18】源氏、葵上と結婚する

やがて、その夜、大臣の御里に源氏の君まかでさせたてまつりたまふ。作法世にめづらしきまで、もてかしづきこえたまへり。いときびはにておはしたるを、ゆゆしく美しと思ひきこえたまふ。女君はすこし大人びたまへれば、いと若くおはするを、似げなく恥づかしと思したり。

この大臣の御おほえいとやんごとなくおはするに、母宮、帝の御后腹の皇女にて、当帝の御姉妹におはしければ、いづ方につけてもいとはなやかなるに、この君さへおはしそひぬれば、春宮の御祖父にてつひに世をまつりごちたまふべき右の大殿の御勢ひは、ただ今ものにもあらず圧されたまへり。

御子ども、腹々にいと多くものしたまふ。この宮の御腹のは、蔵人の少将にていと若くをかしきを、右の大臣、御仲はよからねど見過ぐしたまはで、いとかなしうしたまふ四の君にはせたてまつりたまひて、劣らずもてかしづきたまへば、あらまほしき御あはひどもになん。

藏人所の御鷹をとまらせて拝領なさる。御階のもとに親王たちや上達部が並び、禄を身分に応じて頂戴なさる。

当日に御前に献上される檜割子、折櫃物などは、右大弁がご指示を承つて準備させた。屯食や禄の唐櫃なども置き場所がないほどで、春宮の御元服よりも数がまさつていて、かえつてこの上もなく盛大であった。

【18】元服の儀に統いて、その夜、左大臣のお邸に源氏の君をお連れ申し上げなさる。婿取りの儀は類まれなほど立派で、熱心におもてなし申し上げていらつしやる。まことに老年若でおいでになるのを、不吉なまでに美しいとお思い申されれる。女君は少し年長でいらつしやるので、源氏の君が大変お若くていらつしやるのを、不釣り合いで恥ずかしいとお思いである。

この大臣への帝のご信任はたいそう厚くていらつしやるうえ、姫君の母宮は帝の后腹の皇女で、当帝のご姉妹でいらつしやるので、ご夫婦どちらをとっても大変ご威勢華やかであるところに、この源氏の君までも婿に迎えられたので、春宮の御祖父としてゆくゆくは政治を掌中におさめられるはずの右大臣殿のご勢力は、今のところ問題にもならないほど気圧されてしまつてゐる。

左大臣はお子たちを、あちこちの女性との間にたいそう多くもうけられている。この宮がおあげになつたお子は、藏人少将で大変若く立派な方なので、右大臣は左大臣方とご関係

[19]

源氏、藤壺女御への恋心に苦しむ

源氏の君は、上の常におぼつかながり、召しまつはせば、心安く里住みもえしたまはず。心の内にもただ藤壺の御容貌、ありさまを類なしと思ひきこえたまひて、さやうならん人をこそ見め、世に似る人なくもおはしけるかなとのみ思ひありきたまふ。大殿の姫君、いとをかしげにてかしづかれたまへる人とは見えたまへれど、心にもつかずおぼえたまひて、幼きほどの心ひとつに置き所なく苦しきまでぞ嘆かしかりける。

〔63〕

大人びたまひて後は、ありしやうにも御簾の内などにも入りたまはず、御遊びなどの折々、琴笛の音に聞こえかよひ、ほのかなる御声、けはひばかり聞くを慰めて、内裏住みのみ好ましくおぼえたまへば、五六日とさぶらひたまひて、大殿には二三日など絶え絶えにまかでたまへど、ただ今は幼き御ほどによろづを罪なく思しなして、はかりもなく嘗みかしづきたてまつりたまふ。さぶらふ女房、童よりはじめて、世におしなべたらぬを選りととのへ、すぐり出でてさぶらはせたまふ。御心につくべき御遊びをよろづにおほなおほな思したるさま、おろかならず。

[19] 源氏の君は、帝が常に会いたがられ、お召しになつてお側に置かれるので、ゆつたりと自邸で過ごすこともおできにならない。心中でもただ藤壺女御のご容姿やお姿を類もないと思ひ申されて、「この方のような人をこそ妻にしたい。世にまたとなく優れていらつしやることよ」とのみ絶えず思い続けていらつしやる。左大臣の姫君は大変すばらしく、大切に育てられた人だとお見受けするものの、心をひかれないとお感じになつて、藤壺女御のことを幼心にも一心に、身の置きどころがなく苦しいほどに嘆かれているのだつた。

元服なさつてからは、かつてのようすに藤壺女御の御簾の中などにもお入りにならず、管弦の御遊びなどの折々に、琴笛の音に託して互いに心を通わせ、ほのかなお声や身じろぎの音ばかりを聞くを慰めとして、内裏住みのみを好ましいとお感じなので、宮中に五六日と伺候なさつて、左大臣邸には二三日などというふうに途絶えがちに退出なさるけれども、大臣は、今はまだ幼いお年頃なのでまつたく悪気はないご自分に言い聞かせられて、はかり知れず精を出してお世話をしあげていらつしやる。お仕えする女房、童をはじめとして、

は良くないもののお見過ごしになれば、たいそう可愛がつてゐる四の君に縁付かせさしあげなさつて、左大臣が源氏の君になさるのに劣らずこの蔵人少将を大切にお世話をなさつてゐるので、どちらも理想的なご関係である。

内裏には、もとの淑景舎を御曹司にて、故御息所の御方の人々まで散らずさぶらはせたまふ。里の殿は修理職、内匠寮などに宣旨くだりて、二なく改め造らせたまふ。  
 もとの木立、山のたたずまい、おもしろき所なりけるを、いとど池の心広くしなし、めでたく造りののしる。かかる所にも思ふやうなる人を具して住まばやと思ほしまさる。「光る君」とは、高麗人の愛でて付けたてまつりたる名なりとぞ。

内裏では、母君のときから淑景舎を御曹司として、亡き御息所の女房たちを散り散りにさせないで仕えさせていらっしゃる。御息所の里第は、修理職や内匠寮などに宣旨が下つて、またとなくすばらしく改装おさせになる。もとからある木立や築山の佇まいが情趣にみちた庭であるのを、さらに池を広々と造りなし、立派に造営するのに賑やかである。源氏の君は、「このよくなところに、理想とするような人と連れ添つて住みたいものだ」との思いを強くされる。

「光る君」という称は、高麗人が感嘆してお付け申し上げた名であるとか。

### 〔校訂付記〕

- 1 原文「なげきお、ふ」。『陽明叢書』は「嘆き多う」、『源氏物語別本集成 統』は「嘆きを負ふ」と解釈する。格助詞「を」を「お」と表記する例は桐壺巻にはないため、本稿では「嘆き覆ふ」とし、嘆きを広く行きわたせる意で仮に解釈した。ただし、「覆ふ」をこの意で用いる例は中古には確認できなかつた。後考を俟つ。同筆。
- 2 「あつかひくさ」。「に（カ）」の上から「さ」を重ね書きする。
- 3 「きよら」。虫損があるが、「ら」と判読した。

- 4 「をとこみこ書きへ」。第一種のミセケチであるため、「を」を削除して本文をたてた。
- 5 「御らんするに」。虫損があるが、「る」と判読した。
- 6 「まうに」と書き、「ま」の上から「ま」を重ね書きし、「う」にミセケチを附してさらに二重線で削除し、「に」の上から「り」を重ね書きする。ミセケチは第一種、訂正は同筆かと思われる。
- 7 「あながちなる」の「なる」を擦り消して「に御」を書く。
- 8 「心ことに」。虫損があるが、「心」と判読した。
- 9 原文「され事もや」の「れ」の上から「る」を重ね書きする。



52 51 「△（左カ）大弁」の上から「右大」を書く。  
 「かし」きは△△〈判読不能〉にての「△△」を擦り消して「か  
 セ」を書く。

53 「ゆ△〔かカ〕すゑ」の「△」の上から「く」を書く。  
 「ことに△〈判読不能〉」の「△」の上から「て」を書く。

54 53 「かし△（とカ）き」の「△」の上から「い」を書く。  
 「なずならひ」とあって、本文不審。誤写や脱字等の可能性も  
 考えられる。ひとまず「なずらひ」の誤写と解釈した。  
 「ものしふ△（をカ）」を擦り消して「おはします」を書く。

55 54 「なずならひ」とあって、「おはします」を書く。

56 55 「御心おしも」の「も」の上から「は」を書く。

57 「かきりなき」を擦り消して「ある事」を書く。

58 57 「いときなき」の「き」の上から「け」を書く。

59 58 「もとゆべ」の「い」を擦り消して「ひ」を書く。

60 59 「はなやかにるに」の「に」の上から「な」を書く。

61 60 「ありしやうにも」。第三種のミセケチであるため、「も」を残  
 して本文をたてた。

62 61 「ありしやうにも」。第二種のミセケチであるため、「も」と、」を  
 削除して本文をたてた。

（かわらい・ゆへい 就実大学  
 まつもと・おおも 関西大学）

〈付記〉本稿をなすにあたり、陽明文庫文庫長の名和修先生  
 より、当該資料への閲覧調査や公刊の申請・許可に際して、  
 格段の心配慮との指導を賜った。ここに心より御礼申し上げ  
 る。なお、本稿は、科学研究費補助金（若手研究・課題番号  
 20K12938／若手研究（B）・課題番号17K13402）の成果の  
 一部である。